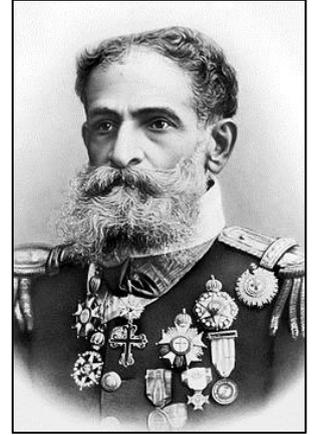


記念日のいわれ No.9

11月15日…共和制の日 (Proclamação da República)

11月15日は「共和制の日」または、「共和制宣言記念日」という祝日です。いったいどんな日なのでしょう。

1889年、黒人奴隷制度の無補償即時廃止（奴隷解放）が実現した翌年の11月15日の早朝、当時の首都リオデジャネイロで、約2000名の陸軍部隊が決起し、市街地を行進し始めました。部隊の先頭に立つのは、デオドロ・ダ・フォンセッカ将軍（Deodoro da Fonseca：下絵）です。喘息で病床にありましたが、飛び起きるとすぐに馬で駆けつけました。決起部隊は王宮を包囲し、各省の建物を占拠し、ここでフォンセッカ将軍によって、帝政の廃止と共和政府の樹立が国民に布告されました。このとき、皇帝ドン・ペドロ二世（Dom Pedro II）は、リオデジャネイロから少し離れたペトロポリスの離宮に滞在中でした。こうして1822年9月7日にドン・ペドロ一世（Dom Pedro I）のポルトガルからの独立宣言によって成立した君主国家は、67年間の幕を閉じたのです。



実は、このクーデターの実際中心人物は、ベンジャミン・コンスタン陸軍中佐でした。彼は、フランスの哲学者オーギュスト・コントの影響を受けた共和思想の持ち主で、コントが唱える『秩序』と『進歩』（この言葉は、現在のブラジル国旗にも『ORDEM [秩序] E PROGRESSO [進歩]』とかがかかっています）をブラジルにもたすためには、帝政を廃止して、共和制を打ち立てねばならないと信じていました。そして、この思想はパラグアイ戦争（1865年）以来威信を強めた軍部、特に若手士官の間に広まっていったのでした。

一方、カトリックの聖職者の中にも皇帝が教会に干渉し、司祭の任命にも政府の許可が必要になってきたことに反発して、堂々と帝政打倒を叫ぶものさえありました。また、奴隷を無償で解放したことに対する大農場主たちの不満も強まっていました。皇帝を支えてきた軍部、聖職者、大農場主という3つの支柱がぐらつきだしてきたのです。

そこで、コンスタン中佐は、陸軍の長老で皇帝とも親交のあるフォンセッカ将軍を担ぎ出すことを計画し、クーデター決行の数日前に、将軍に決起の先頭に立つように説得しました。共和制のことなど微塵も考えていなかった将軍は、恩義を受けた皇帝に反旗を翻すことに悩みながら、しぶしぶこれを承諾したのでした。

クーデターは無血で血を流すことなく成功しました。「無血革命」といわれることもあります。ですが、そこには強い民意があったわけではありません。民衆は何が起こったのかもわからず、無関心だったといわれています。そういう意味でもやはり、「共和革命」ではなく「共和制の宣言」とするのが正しいのでしょうか。

